

さまざまなレベルが混在する日本語学習者を対象とした 日本語eラーニングプログラムの構築について

～静岡方言とそれを使用する日本人学生と日本語学習者の交流に着目して～

Consideration given when building a Japanese e-learning program for
Japanese learners who are in various levels

-Focusing on foreign exchange students who interact with Japanese students
with local Shizuoka dialect-

市 原 乃 奈

1：研究の背景と目的

本研究の目的は、

①「日本語教育」と「国語教育」の認識と区別を明確にしたうえで、本学の日本語教育を基盤を作る。

②本学の日本語教育に生活語としての地元方言を取り入れる。

の上記二点である。本稿では、筆者が担当している「日本語eラーニングプログラムの構築」について特に「聴解力」を向上させるためのコース教材製作とその試みについて報告する。また、日本語の集団授業やオフィスアワーを利用した補習授業を補完する目的のほか、本研究を切っ掛けにして、大学部と短期大学部に所属する留学生に対し、横断的な学習ができる環境整備が継続して行われることを期待したい。

筆者は2016年4月18日（月）～2016年4月29日（金）までの間、筆者研究室を訪れる留学生に以下の質問をインタビュー形式で行った。あくまでも日本語に関する観点からの質問に限り、各分野の専門的なことには立ち入らないことをお互いに厳守しながら行った。インタビュー時間や同席数に制限は設けず、食事をしたり予習をしたり各自自由な時間を過ごししながら回答してもらった。質問事項は下記のとおりで、期間中59名の留学生が協力してくれた。質問1～2の回答結果から、42名の留学生が何らかの不安を抱えている¹ことが分かった。インタビュー結果を表1に纏めた。

質問1：いろいろな授業がありますが、先生の話す内容は理解できていますか。また、日常生活の中での人との会話や駅などでのアナウンスは理解できていますか。
質問2：どれくらい理解できていますか。また、理解できていない理由は何ですか。
質問3：日本語のサポートとして、学校や先生にどんなことをしてもらいたいですか。
質問4：今、どのように日本語を勉強していますか。
質問5：もし、日本語eラーニングが無料で受けられるとしたらやってみたいですか。
質問6：日本語eラーニングにどんなコースがあったらいいですか。

¹ 2016年4月、本学留学生センターが在学中の留学生に対し、「授業について」と「生活について」の調査を挙手制にて実施。約93%が「授業は問題なく受講できている」、約95%が「日本語学習や日本語能力に不安はない」と回答。筆者は本学に2016年着任、留学生の授業デザインのため再調査を実施。

表1 質問1～質問2 インタビュー集計結果

学生通し番号	【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	【6】	【7】	【8】	【9】
1	○							○	
2	○							○	
3	○							○	
4	○					○			
5	○					○			
6	○					○			
7	○					○			
8	○					○			
9	○			○	○	○			
10	○			○	○	○			
11	○			○	○	○			
12	○			○	○	○			
13	○		○	○	○	○			
14	○		○		○	○			
15	○		○		○	○	○		
16	○		○		○				
17	○				○				
18	○				○		○		
19		○							
20		○							
22		○							
23		○					○		
24		○					○		
25		○					○		
26		○			○		○		
27		○			○	○	○		
28		○			○		○		
29		○			○		○		
30		○	○		○		○		
31		○			○		○		
32		○			○				
33		○			○				
34		○	○		○	○			
35		○		○	○				
36		○			○				
37		○			○	○			
38		○	○	○	○		○		
39		○		○	○	○	○		
40		○		○	○	○	○		
41		○	○	○	○	○	○		
42		○	○	○	○	○	○		
43				○					○
44				○					○
45				○					○
46				○					○
47				○					○
48				○					○
49				○					○
50				○					○
51				○	○				○
52				○	○				○
53				○	○				○
54				○	○				○
55				○	○				○
56				○	○				○
57									○
58									○
59									○

【1】～【9】の項目は全て留学生から出たもので、本表では表頭としても扱っている。その内訳は、【1】話す速度が速いと聞き取れない。【2】英語や日本語だけでなく、多言語を混ぜて話されるとわからない。【3】語尾が聞き取れない。【4】独特な字を書かれると読めない。【5】独特な話し方をされると理解できない。【6】板書やPPTの切り替えが速すぎて、読んだり書いたりすることについていけない。【7】聞き取りはできるが、どういう意味かわからない。

【8】何がわからないのかわからない。もしくは、ほとんどわからない。【9】不安はない。というようになったが、生活のうえで不安はないと回答した留学生からも、「変な字や変な話し方をされるとわからないことがある」など、ある状況下では日本語の理解が困難になると答えたため、表1の【9】の欄のほか、当てはまる表頭箇所に○を付した。表1を分析すると、日本語能力が高い者は、どのような状況下で理解が困難になるか認識できており、「いわゆる日本語学校等で学習してきた日本語」を基準として「わかる／わからない」を決定している。例えば、「うちっち」という静岡方言があるが、これは主に「私たちのグループ」を意味する。留学生の一部と関東出身の筆者は当初「私の家」の意味だと解していたが、そうではなかった。留学生の中には「内田君」の愛称だと解していた者もいた。また、オープンキャンパスの資料を作成していた時、日本人学生が「はみ出すと見栄えが悪い」と述べた。筆者は「はみ

さまざまなレベルが混在する日本語学習者を対象とした日本語eラーニングプログラムの構築について

出す」のアクセントが方言なのだと解したが、留学生が「Adidasは持っていません。当日はUNDER ARMOURでもいいですか。」と言いだすハプニングもあった。笑い話のようだが、このようなことは日常茶飯事である。本学日本語中級レベルの留学生は「表記」で考えることはできず、既習の語彙から類似したアクセントやイントネーションに当てはめて解釈している。既習事項の干渉とでも言うべきであろうか。また、本学の日本語能力が未熟な者は、コミュニケーションのための音声習得ができておらず、単なる音としてしか日本語を認識できていない。そのため、聞き逃してしまったものは全て発話速度に原因があると考えられる傾向がある。

2. 本学の留学生に必要な日本語教育

筆者が行った質問1～2は、留学生が日常生活や授業の中で日本語能力が原因となっておこる弊害を把握することと学内の教職員が配慮すべき範囲を検討する目的で行った。これに関する事前調査として、筆者は2012年～2014年の合計3回、日本健康医療専門学校ライフデザイン学科（以下：日健）に在籍する、日健が初めての日本留学となる日本語が流暢な学生に対して「日健に留学する前に自分自身でどのような日本語学習を行ってきたか」夏期休暇前最後の日にインタビュー調査を行った。この中には自国の日本語学校や大学で学んできた者も含まれるが、彼らが一貫して行っていたことは、「読む力・聴く力の強化」を行った後に「話す力・書く力の強化」を行っていることであった。11名が調査に協力してくれたが、全員が「日本のCDをたくさん聞く」「日本のDVDをたくさん見る」「YouTubeで日本語を話している動画／音楽をたくさん鑑賞する」のように、「見る・聞く」のみの期間を経てから文法や会話の学習に移行していることが分かった。JLPTやEJUの問題集着手にあたっても、初期段階では聴解のみを行い、「わからない語彙を調べる」「ひたすらスクリプトを写す」「漢字を書き写す」「とにかくテキストを音読する」という期間を経てから文法を学習したり文章を作ってみたりする学習に移行していったこともわかった。本格的な会話は留学してから始めたという。また、「よく、間違えてもいいからとにかく話さないと言われるが、なぜ会話の練習はあとから始めたのか」を尋ねてみると、彼らからは、「読んだり聞いたりできなければテキストの内容は理解できない」という共通した答えが返ってきた。

これらの事前調査の結果と先に記した質問1～2の結果を総合して検討すると、本学の全留学生は日本の日本語学校または各種専門学校等で2年以上修学した者、もしくは母国でそれなりの訓練を積んできた者であるため、先に掲げた二つのステップに加え「自身の日本語能力を総合的かつ客観的に分析する」前提作業が必要となってくる。日本語能力を自らが認識したうえで聴解力を鍛えることが本学の留学生の日本語学習再スタートとして必要なプロセスであると仮定できる。

3. コースの検討と設置

日本語eラーニングシステムを構築するにあたり、「ちえ蔵」のオープンソースLMSクラウドサー

ビスのMoodle3.0を用いた²。Moodleは学生が時間を問わずにアクセスできる点、教員が学生のログイン履歴を抽出できる点、ユーザー同士が情報を共有できる点、本学の学生に制限して管理できる点が評価でき導入に至った。現段階では試行段階であるため、留学生の要望を反映しつつも本学の日本語教育のコースデザインに効果的に作用するものをあわせて設計していかなければならない。この開発途中の日本語eラーニングは、大学カリキュラム全体の中の「専門ゼミ」に入る前の日本語総仕上げとして位置づけ、全ての授業で困らぬよう自力で内容理解と把握ができるスキルを身に着けられるものにすることを目標とした。そして、留学生の孤立を防ぐため、表現のバリエーションや地域言語的要素を習得できる場を作り、留学生という括りではなくゼミの仲間として生活が送れるようコース設定に配慮した。

留学生の日本語に関するニーズと学習状況の調査について、前項「1. 研究の背景と目的」で掲載した質問3～4の結果を以下に記す。

【質問3】

- 日本人の先生から日本語を学びたい：44名
- 日本語に関する質問にすぐ答えてくれるセンターがほしい：31名
- 授業以外の配布物は、中国語・英語・ベトナム語等のものも作ってほしい：24名
- 日本人学生と仲良くできるように関係をとってほしい／仲良くなれるイベントを企画してほしい：16名
- 自分専属の日本語サポートスタッフ（学生でもいい）を割り当ててほしい：9名

【質問4】

- やっていない・していない：19名³
- JLPT対策の問題集で学習：18名⁴
- 本学の日本語関連の授業のみの学習：16名⁵
- それどころではない：6名⁶

【質問5】

- やってみたい・絶対やる・してみたい・絶対する：37名
- 監視・強制でないならばやってみたい・してみたい：12名

【質問6】

- 特殊な会話表現（方言・癖）の種類を体験するコース：34名
- 静岡のことや学校の近くのことを学べるコース：25名
- JLPT対策コース：23名

² 2017年4月からは学内サーバーにてMoodleを試行中。「ちえ蔵」は継続使用中。

³ 内17名は質問1～2で日本語に対して不安はないと回答した者／その他2名は通し番号15と38の学生で日本語能力が高い者ではなく、理由は「面倒くさい」と回答。

⁴ 内2名は本学日本語関連科目を履修中。

⁵ 内10名が該当授業のみで手一杯と回答。

⁶ 本学日本語関連科目も含め、全ての授業について行けていないので、何をすればいいのかわからないと回答。

さまざまなレベルが混在する日本語学習者を対象とした日本語eラーニングプログラムの構築について

- 「あげる」「くれる」「もらう」などの授受表現コース：11名
- 擬音語擬態語コース：8名
- 正しい発音コース：6名
- 日本語チェック（発音・文章）をしてくれるコース：5名
- イントネーションで意味の差異が生じることを学ぶコース：3名

上記「質問6」には、日本語学校で学習する日本語とは異なる地域性の強い方言のようなものと各々の話し方の癖のようなものがあり、留学生は両者の判別がつかない場合も多い。また、標準語では「～する{の／ん}だよ」は「する」と「だよ」の間に助詞を介すが、静岡県では「動詞の終止形＋だよ」で「～するだよ」となる。標準語と酷似しているがゆえに、日本語学習者の気づきと指導者による学習者の誤使用の発見が難しく、かつ学内での使用率が高いことから標準語と疑わない者が多く、修正は一筋縄ではいかない。

日本語教育の中に方言教育を取り入れるか否かについては古くから議論が重ねられており、未だ確たるメソッドは確立されていない。本研究は、次の先行研究を指針とした。真田信治（1992）では、

日本語学習者が生活の場で必要とする方言の実体は、いずれにしても決して単純なシステムティックな伝統方言（いわゆる純粋方言）ではありえないはずである。その必要とされる対象は、地域言語社会で、生きてダイナミックに展開していることば、そのものであろう。

とし、地域言語社会の中で展開されている方言に着目すべきことが示されている。田尻英三（1992）では、「日本語教育に利用できるような方言資料の不足」という章をたて、

留学生が実際の言語生活で接する方言は、老人層のそれよりももっと共通化したものであろう。その古い形も新しい形もないまぜにしている生活言語に実態は、今一つ明らかになっていない。その点では、最近成果を上げている「新方言」の研究も同様である。むしろ、最近流行らない「共通語化」の研究の方が利用価値があるとも言える。

とし、簡単には各地域共通の方言マニュアルが作れないことを指摘している。さらに、真田信治（1992）では、

外来者の方言使用に対しての土着日本人の意識、評価の問題で（中略）外国人に限らず他郷の人とわかる人がその土地の方言をペラペラとしゃべることについて、必ずしも好感をもって迎える人ばかりではないのではないか。

と言及している。この指摘に当てはまる現象が2点確認できた。ある日、筆者研究室に留学生男女

各1名と日本人女子学生1名、日本人男子学生2名が訪れた。その理由は、ゼミ発表のためのハンドアウトを作りたいので研究室を使用させてほしいとのことであった。筆者は終始傍観する形で、必要に応じて質問に答えるというスタンスをとっていた。その中で、日本人学生は日頃「～だから」を意味する「～だもんで」をこれでもかと言わんばかりに使用しているにもかかわらず、留学生2名に対して「「だもんで」って、どこでそんな変な日本語覚えたの？」と自分たちが未知の言葉に接したかのような疑問を投じていた。日本人学生同士の場合は、あまりにも日常化しすぎていて自分たちの使用している方言には気づかないようだ。彼らの使用する「だもんで」は文脈に応じてアクセントの位置が異なりはするが、概ね頭高もしくは中高になる。しかし、留学生の「だもんで」は尾高となり、違和感からの気づきであったと推測できる。また、掛川市の日本語教室でボランティアの方から日本語を今でも学んでいるという留学生が「～けど／だけど」に相当する部分に「～けんさゝ／だけけんさゝ」を多発させている。これに対して、日本人学生同士の場合ではお互いの方言を指摘することはないのだが、留学生との会話に限って、わざとその部分を強調させてからかったり、それとは逆に方言の使用を歓迎したりする日本人学生の姿が確認できている。

また、留学生の方言との接触に関し、田尻英三（1992）では、

鹿児島大学では、留学生は日本人学生同士の方言混じりの会話に入り込めず疎外感を抱いていたようであったし、教師も鹿児島県出身者の場合は、本人の意識無意識にかかわらずかなりの方言が講義の中に混じり、ノートがとりにくい状態であった。

という、本学でも確認できる状況が記されている。これに伴い、筆者の日本語学ゼミに所属する16名と「日本語表現法」を履修している82名に「自分自身が地元の方言を使用しているか」「地元の方言を聞いて認識できるか」「地元の方言を地元以外の人が使用した場合どんな印象を受けるか」この3点についてそれぞれ記述式で回答してもらった。記述用紙の配布日は2016年6月2日（木）の昼休みに行き、翌週9日（木）の昼休みに一斉回収した。言語形成期を静岡県以外で過ごした者もしくは保護者が県外出身者である者が4名いたが、それ以外は全員静岡県内で過ごしている。結果は、76名が自分自身で方言を話しているという認識はなく⁷、22名は使い分けをしていると回答した。前者のほとんどが関東とは異なるアクセントで話し、地域性の強いことばも使用しているが、彼ら自身はそれには気づかず「～ずら」のような伝統的な方言に限って認識できると回答した。後者の出身地は静岡市・浜松市・藤枝市・焼津市・掛川市・牧之原市・下田市出身の者であるが、浜松市と掛川市の2名については、「CMなどで、なんちゃって方言を話されると不快」と答えた。

ダニエル・ロング（1992）では、自身が日本語教育を受けた側としての視点に立ち、日本語学習者の関西弁聴解力に関する調査結果を記している。

⁷ 個人発表を行った際にアクセント・地域言語・方言をチェック済み。

さまざまなレベルが混在する日本語学習者を対象とした日本語eラーニングプログラムの構築について

授業で教わらなくても、方言をある程度理解するようになるのも可能であるが、教室で方言（特にそれと標準語との対応のしかた）を体系的に教える方が、「自然習得」に比べ、より速い、しかもミスコミュニケーションによる混同を少なくする効果があると思われる。

これらの先行研究者の研究成果を辿ることは、方言と言えるものを持たない者が方言を持つ地域に入り、日本語学習者の指導を行うことの困難さを学び、ことばの問題だけではなく、その地域の人々の文化と乖離できない問題が含まれているがゆえに、慎重に行わなければならないことを再認識できた。これらを受け、本学で日本語学習者の聴解力を鍛えるための必須要素は、①地域言語が用いられている発話の実例と意味解釈の提示、②さまざまな癖を持つ発話の実例とその意味解釈の提示、の2つが含まれていることである。大切なことは、地域言語がどのような意味で使用されているのか日本語学習者に理解できるようなサポートをすればよいのであって、実際にそれを使用できるようにすることまでは求められてもいないし、必要もないのである。この結論に基づき、設定したコースは図1の通りである。

図1 コースの種類

SHIZUOKA-EIWA Moodle 日本語 (JA) ▼

日本語のひろば

新しいコースを作成する | コースを並べ替える ▼

- ❖ ☐ コピーや丸写しは犯罪！参考文献引用のルール
- ❖ ☐ 質問を共有しましょう！
- ❖ ☐ 宿題～Homework～
- ❖ ☐ 静岡のことば
- ❖ ☐ 発音博士の「日本語の発音」講座
- ❖ ☐ さまざまな先生の授業を聞いてみよう！
- ❖ ☐ 聴解問題 ～静岡ゆるキャラ編～
- ❖ ☐ 完全マスター ～あいづち（相槌）～
- ❖ ☐ 完全マスター ～擬音語・擬態語・名詞・慣用句～
- ❖ ☐ 完全マスター ～日本語授受表現～
- ❖ ☐ 日本語検定試験練習問題 ～JLPT－N2～
- ❖ ☐ 日本語検定試験練習問題 ～JLPT－N1～
- ❖ ☐ 日本語検定試験練習問題 ～JLPT－N3～
- ❖ ☐ JLPT 1 級対策 ～超級表現～
- ❖ ☐ 言語学基礎～入門編～

4. コースの特徴と受講者の反応

この日本語eラーニングシステムの特徴は、各コースの中に筆者ゼミに所属する留学生の学習の記録と日本人学生がサポートしている姿をリアルタイムで掲載している点である。

それ以外はMoodleの機能を有効活用している。各コースのアクセス数とアクセス時間は表2のとおりである。本学の留学生数は96名であるが、そのうちこのeラーニングに登録している者は71名となっている。日本語能力が芳しくない学生の日々の鍛錬を載せることによって学習者は励みとなり、アクセスしやすい環境となっているようである。質問コーナーには地域言語に関する質問が多く寄せられており、この点からも静岡という地域の隠れた方言が多種存在し、留学生の関心も高いことがうかがえる。学習者のモチベーションを保つためにアクセス回数10回を超えるごとに激励メールを送信し、達成状況はeラーニング内の掲示板と筆者研究室の扉に掲示した。個人アクセスが30回に到達すると東京書籍の方からいただいた日本語検定の過去問題を進呈するイベントも行った。日本語能力の向上について現段階では未計測である。しかし、大学入学後、日本語の学習時間が一時衰退した者が再度日本語と向き合う時間として回復していることは明らかである。

本学の日本語eラーニングシステムの一例を図2～4に示す。

表2 各コースのアクセス数とアクセス時間

コース名	静岡方言	ゆるきゃら	多種講義	質問コーナー	授受表現	擬音語擬態語	発音
アクセス数	684	622	601	554	429	301	208
アクセス時間(分)	63601	63706	10125	1109	51480	21672	824
コース名	引用ルール	相槌	N1	N2	N3	超級表現	
アクセス数	109	49	25	56	27	11	
アクセス時間(分)	1690	48012	6214	11457	5963	402	

図2 留学生と日本人学生の様子

♡聴解問題 ♪～静岡ゆるキャラ編～

私たちもチャレンジ中です！



ゆるキャラということばを聞いたことがありますか？

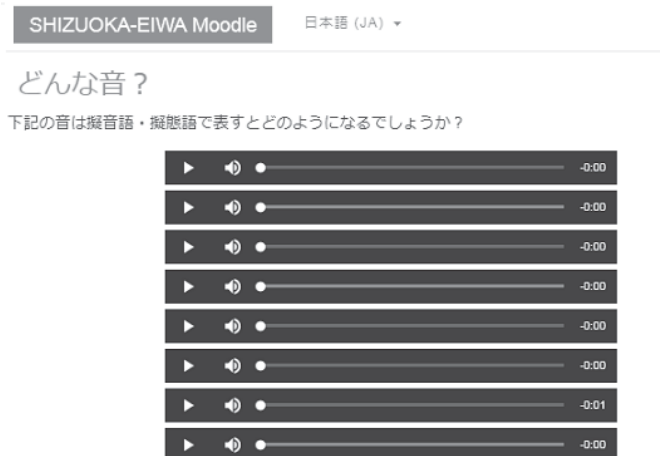
ゆるキャラとは、「ゆるいマスコットキャラクター」を略したもので、イベント、各種キャンペーン、地域おこし、名産品の紹介などのような地域全般の情報PR、企業・団体のコーポレートアイデンティティなどに使用するマスコットキャラクターのことです。特に地域のPRを目的としたものはご当地キャラともいいます。

静岡県にもゆるキャラが存在します。あなたの身近にも、ゆるキャラがいるかもしれません。



さまざまなレベルが混在する日本語学習者を対象とした日本語eラーニングプログラムの構築について

図3 擬音語・擬態語・名詞・慣用句の一例



下記は上記を擬音語・擬態語で表したものです。比較してみましょう。

- ・キヤーキヤー＝女性や子どもが興奮して高い声を出して騒ぐ時の様子。
- ・グーグー＝寝ている時に出す「いびき」の音。寝ている時の呼吸の音は「寝息」で、「スーす」。
- ・コンコン＝木でできたドアなどをたたくときの音。ノック。
- ・グツグツ＝鍋で長時間煮る時の音。
- ・バリバリ＝せんべいやかためのスナック菓子を食べる時に出る音。
- ・ジャージャー＝水道の蛇口やトイレの水が勢いよく流れる音。

図4 聴解問題～静岡のことば～の一例



5. 今後の課題と展望

eラーニングに依存させてしまうと、自分で書籍を選ぶ機会とその力を奪うことにもなる。試行段階とはいえ、課題は多い。今後、教材をどのように蓄積し、汎用させていくか検討中である。そして、今後さらに構築を進めるにあり、本学図書館にある資料と重複しないものを提供していかなければならない。実現のためには筆者だけではなく、開発の側に協力者が必要となってくる。

その一環として、2017年度前期より日本語学・日本語教育学に関する専門演習履修者および筆者ゼミに所属する学生を中心として、本件に関するプロジェクトに取り組む計画を立てた。日本人学生と外国人留学生が共に学んだ知識を共有し合いながら「日本語文法教材」や「日本語eラーニング」の構築を行い、互いの問題解決を図ることを目指すものである。筆者自身、この地に根を下ろしたばかりであるため、地域言語の保存という観点からも静岡県のことばを見つめていきたい。

【参考文献】

- 日本語教育学会編（1992）『日本語教育―方言と日本語教育<特集>』日本語教育学会
以下上記所収
真田信治「方言の状況と日本語教育」pp.1-8
田尻英三「日本語教師と方言」pp.9-20
ダニエル・ロング「日本語教育における「方言教育」の問題点」pp.42-54
家田章子（2013）「日本語教育におけるeラーニング活用の可能性（特集ことばのデータ集：日本語教育編）」『日本語学』32 pp.70-82 明治書院
ダニエル・ロング（1997）「外国からみた日本語の方言―海外の研究者が日本の方言研究について知りたがっていること（特集 日本語の方言と言語行動）―（方言文化と言語行動）」『國文學』42 pp.38-43

學燈社

山本千波（2013）「Eラーニングコース開設における考察と日本語Eラーニングコースのための留意点」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28 pp.135-149 筑波大学留学生センター

森由紀（1995）「外国人の方言学習をめぐる考察」『三重大学日本語学文学』6 pp.122-109 三重大学日本語学文学研究室

【調査協力者】

静岡英和学院大学・短期大学に在学する留学生59名

2016年度 筆者担当「日本語表現法」を履修している日本人学生82名

日本健康医療専門学校ライフデザイン学科に在学する留学生11名

2016年度 筆者の日本語学ゼミに所属する16名

【eラーニングプログラムの所在】

静岡英和学院大学「日本語のひろば」『SHIZUOKA-EIWA Moodle』

<http://www2.shizuoka-eiwa.ac.jp/moodle/>

VERSION2 静岡英和学院大学人間社会学部人間社会学科 市原乃奈

「Nihongo2016」『ちえ蔵』

Nihongo2016.chiekura.jp

VERSION2 静岡英和学院大学人間社会学部人間社会学科 市原乃奈

「Nihongo.Gengogaku2017」『ちえ蔵』

Nihongo.Gengogaku2017.chiekura.jp